

第二章 2012年大統領選挙とティーパーティー運動、そして今後の展望

中山俊宏

はじめに

2010年前後にアメリカ政治の舞台にティーパーティー運動が突如として姿を現してからすでに2回の選挙が行われた。2010年の中間選挙はまさに「ティーパーティー選挙」と呼んでもおかしくないほど、その勢いには目覚ましいものがあった。2008年の大統領選挙がまさにアメリカ史の大きな分水嶺となるような選挙と解されただけに、それに真っ向から抵抗するようなティーパーティー運動の出現は驚きをもって迎えられた。その思想内容自体は特に目新しかったわけではない。しかし、ティーパーティー運動は、いわばフィルターがかけられる以前の剥き出しの保守主義的衝動に突き動かされ、バラク・オバマ(Barack Obama)大統領の世界観と真っ向からぶつかり合い、反オバマ運動の様相を呈していった。その烈度ゆえ、妥協を受け入れず、いくつかの選挙において、共和党候補の敗北に帰結したケースもあったが、全体としてみれば、ティーパーティー運動の勢いに共和党が便乗し、歴史的な勝利をおさめたのが2010年の中間選挙だった。

しかし、2012年の大統領選挙においては、ティーパーティー運動が共和党に対して及ぼした影響はより複雑なものだった。2010年の「勝利」によってさらに先鋭化した運動は、共和党エスタブリッシュメントに対しても牙を剥き、より純化された「保守的衝動」が共和党自体を右傾化させ、それが大統領選挙をはじめ、上院議員選挙でも負の効果を及ぼしてしまったことは否定しようがないだろう。

選挙後、ティーパーティー運動はその影響力を後退させている。しかし、その一方で、下院のティーパーティー・コーカスには50人近くの議員が所属し、上院においてもランド・ポール(Rand Paul)議員(ケンタッキー州)やテッド・クルーズ(Ted Cruz)議員(テキサス州)をはじめとして、党内のライジングスターと目されている議員たちの多くはティーパーティー運動からの強い支持を受けている¹。「財政の崖」や「債務上限引き上げ」問題をめぐるホワイトハウスと議会との駆け引きの中でも、ティーパーティー運動が象徴する保守的衝動が共和党指導部を強く拘束しているのが現状だ。また、はやくからティーパーティー運動に手を差し延べ、上院において運動の代弁者であったジム・デミント(Jim Demint)議員(サウスカロライナ州)が議員職を辞しヘリテージ財団の会長に就任したが、これは保守主義運動の重要な戦略的拠点が大きくティーパーティー運動の方向に舵を切ったということでもあろう。このように、ティーパーティー運動は全体としては、後退しつつも、依然とし

て無視できない影響力を共和党内で発揮しうるポジションにいる。

本稿は、これらの動きを踏まえ、ティーパーティー運動の行方を中心に、2012年の敗北を受けて新たな道を模索しようとする共和党、オバマ政権二期目の政権運営、さらにはこれからのアメリカ政治の動向に及ぼす影響について考察することを目的とする。

1. ティーパーティー運動の輪郭

そもそもティーパーティー運動とは何だったのか²。この運動自体がアモルフな動きであり、一カ所に固定できる類いの運動ではないだけに、それを具体的な思想内容、または特定の指導者や組織に結びつけて固定しようとする、運動の本質を見誤ってしまう危険性がある。大雑把に言えば、オバマ政権一期目の最初の二年間で示されたオバマ的な統治原理 (governing principle) に対する違和感に根拠づけられた拒否的衝動に根ざした運動であるということは間違いないだろう。ここでいう「オバマ的な統治原理」とは、「7870億ドル規模の景気刺激対策」、「公的資金の投入による大企業の救済」、「金融規制改革法案」、「医療保険制度改革 (オバマケア)」などに象徴される、連邦政府の役割を積極的に肯定していかうとする考え方といえよう。「小さな政府」、「憲法修正第10条 (州または人民に留保された権限)」などの政治シンボルが派手に飛び交いつつも、その底流には「変化していくアメリカ」に対する違和感がこの運動を根拠づけている。しかし、こう規定してしまうと、ティーパーティー運動の重要な一側面を見落としてしまう。それは、オバマ的な統治原理に抗する運動であると同時に、保守主義運動を人民の手に取り戻し、共和党を改めて保守的な原理に基づいた政党につくりかえようとする保守的な原点回帰運動でもあるということだ。

具体的な事例を見ていこう。2012年の選挙の特質のひとつは、上院議員選挙において、ティーパーティー運動が中心になって展開された党内反乱運動が党内エスタブリッシュメント候補に挑み、予備選挙の段階で数年前は想定できなかった番狂わせが起きたことだ。その最も象徴的な事例はインディアナ州の共和党予備選挙で起きた。ディック・ルーガー (Dick Lugar) 上院議員は、共和党上院議員の中でも最も尊敬を集める議員でもあり、外交・安全保障通としても知られ、共和党でありながらも新人議員であったオバマのメンターとしても知られていた。いわゆる「賢人」の風格を漂わせる数少ない上院議員の一人であり、「共和党エスタブリッシュメント」を象徴するような議員でもあった。数少ない超党派的な意識を持っている議員と評されつつも、『ナショナル・ジャーナル』誌が行った2011年の主要法案に関する投票態度に基づく調査によれば、党内穏健派と形容することはできても、決してリベラル派ではないことははっきりとしていた³。しかし、ルーガー議員が標

的にされたのは、まさにルーガーが超党派的な風格を漂わせ、穏健派として知られていたからだ。いわばティーパーティーの攻勢を前にして、ルーガーの強みであったものが、突然、弱みに変わってしまった。それゆえにルーガー議員は、はやくからティーパーティー運動の標的として設定されてしまった。こうしてインディアナ州の共和党上院議員予備選挙は党内反乱運動の象徴的な事例と位置づけられ、最終的にルーガー議員はティーパーティー候補のリチャード・マードック (Richard Murdoch) に敗退する。マードック候補は、11月の本選挙では、民主党の新人候補ジョー・ドネリー (Joe Donnelly) に敗退し、共和党は本来なら勝てる議席をみすみすひとつ落としてしまった。それは、ティーパーティー候補が、運動のエネルギーで充満する共和党予備選挙では勝利をおさめることはできても、本選挙で投票した有権者たちにはあまりに右傾化した、メインストリームからはずれた候補と見なされたからだ。しかし、選挙に勝つための打算と政治的な妥協こそ、ティーパーティー運動が拒絶したのもであった。

このルーガーを敗北に追い込むことになる運動の中心にいたのはティーパーティー活動家を自称するグレッグ・フェティッグ (Gregg Fetting) だった。彼は、ワシントンDCを拠点にティーパーティー運動のサービスセンターとして活動するフリーダムワークス (FreedomWorks) の支援を全面に受け、「ルーガー敗北キャンペーン (Defeat Lugar Campaign)」を立ち上げる⁴。筆者は2012年9月23日に、フェティッグの庭のガレージを改装したキャンペーン本部を訪れ、同氏にインタビューを行ったが、それはまさに手作りの選挙運動でありつつも、ポスターやステッカー、バッジなどはほぼすべてフリーダムワークスによって提供されたものだった。ティーパーティー運動が時としてアストロターフ (人工芝) 運動と呼ばれる所以である。フリーダムワークスは、運動の戦略的な拠点というよりかは、グラスルーツに充満する保守的衝動を政治的に方向づけ、それを増幅させる役割を担ってきたという点において、ティーパーティー運動の台頭を考えていく上で不可欠の存在である。しかし、それは政治に直接働きかけ、保守的な人材の供給や政策立案を通じて首都ワシントンにおける政治そのものに影響を及ぼそうとしてきたヘリテージ財団などのこれまでの保守系組織とは異なった運動原理に基づいて活動している。単純化すれば、ヘリテージ財団は上から運動を組織していこうとするのに対し、フリーダムワークスは「衝動」の在り処を見つけ、それを増幅させることを主眼としている。フリーダムワークスがあくまで自分たちをサービスセンターと自己規定しているのもそのためだ。

フェティッグは、「ルーガー敗北キャンペーン」を振り返って、著書を著している。まったくの政治素人であったフェティッグが「賢人ルーガー」を敗北に追い込んでいった過程を簡潔に再現したものだ。この本の題名は『サファリに行くティーパーティー (Tea Party on

Safari』(2012年)⁵。ルーガーを撃ち落としたというような意の表題だと思ひ読み進めていくと、より具体的な意味があった。いまアメリカではルーガーのような「妥協ができる政治家」は「RINO(ライノ)」と呼ばれている。「RINO」とは「名ばかりの共和党员 (Republican in Name Only)」の頭文字である。マックス・ウェーバーが『職業としての政治』において、政治とは「妥協の技(アート)」であると評したことはよく知られているが、ティーパーティー運動の支持者たちは「妥協 (compromise)」という言葉をとにかく忌み嫌っている。表向きは共和党の政治家という看板を掲げながらも、実際にはオバマの統治原理を受け入れ、自分のルーツを忘れた政治家を見つけると、ティーパーティー運動は直ちにその政治家に「RINO」というラベルを貼り、標的にする。ルーガー議員は、ある意味、「RINO」というラベルを最も貼りやすい政治家であったというわけだ。ティーパーティー運動に限られたことではないが、成功する政治運動はとにかく単純で粘着力のある政治シンボルを編み出し、それを効果的に活用するが、ティーパーティー運動周辺にはそのようなシンボルが満ちあふれている。それは人々をつなげ、運動を方向づけ、活気づけると同時に、複雑な思考を停止させる効果を有している。「サファリに行くティーパーティー」とはまさに、「犀 (=ライノ)」を狩りにサファリにでたティーパーティー運動の意であった。『サファリに行くティーパーティー』には文字通り「アメリカの犀を狩りにいく (The Hunt for American RINO)」という副題がつけられている。

若干、話は逸れるが、『サファリに行くティーパーティー』に興味深いエピソードが紹介されている。ここに引用するのが躊躇われるほど、陰謀論的な世界観をティーパーティー運動参加者(全部ではないにしても無視できない一部の人)が抱いていることが垣間見えるエピソードだ。2012年3月、「ルーガー議員の再選が危ない」というニュースが全米のメディアで報じられていたころ、在米日本大使館の館員が、フェティグに面会を求めたという(このような面会依頼が実際にあったのかどうかは在米日本大使館には未確認である)。この面会依頼をフェティグは訝しく感じる。面会依頼の理由は、ティーパーティー運動のことをよりよく知りたいということだったらしい。しかし、フェティグは最終的にこの面会を断ることを決断する。というのも外交官は「外交特権 (diplomatic immunity)」を有しており、彼らの真意などわかるはずもないからだった。さらにルーガーに関する詳細なリサーチを行っていた知人に相談すると、ルーガーはグローバリストであり、ローズ奨学生としてフェビアン協会と関係があり、外交問題評議会の会員でもあり、ほかの社会主義系団体と関係があるため、面会依頼は絶対に断った方がいいというアドバイスを受ける⁶。というのも、そのようなルーガーを蹴落とそうとしている運動の中心人物を暗殺しようとする試みの可能性があるかもしれないからということだった。フェティグ自身は、「暗殺」

の可能性は現実的ではないとしつつも、彼とともに面会依頼を受け、面会することを最終的に承諾した知人に対しては、とにかく日中に人がいるところで会うように進言したという⁷。

このエピソードを、ティーパーティー運動全体を象徴するようなエピソードとして解すべきではないだろう。しかしながら、現にルーガー議員は、フェティッグが立ち上げた「ルーガー敗北キャンペーン」によって引退に追い込まれ、この事例は2012年の選挙にはっきりとした刻印を残した。現在、二極分化した政治文化に苛まれるアメリカにとって、ルーガー議員のような存在はきわめて貴重な存在であった。しかし、ティーパーティー運動の活動家からしてみると、ルーガーのような存在こそが、オバマ的な統治原理を許容し、アメリカを間違った方向に導いていく元凶であった⁸。ルーガーの敗北が確定すると、オバマ大統領がルーガーの活動を讃える声明を発表したが、このこと自体がティーパーティー運動の参加者たちの確信をさらに強めたことは疑いない⁹。「ルーガー敗北キャンペーン」がそもそも対抗馬のマードック支援運動ではなく、それとは別にルーガー自身を敗北に追い込もうとする運動としてはじまっていたことにもそのような問題意識が端的に現れていたといえる。オバマ大統領が「オバマ的」であるのはしょうがないとして、共和党議員でこれを許容するのは絶対受け入れられないという発想である。ワシントンの住人と化し、ルーツを忘れた「RINO」たちを蹴散らし、保守主義運動をグラスルーツの手に奪還し、そこから共和党自体を保守的な統治原理を基軸にリセットして、オバマ的な統治原理を排除し、アメリカ政治を変えていく。その実現可能性はおいておくとして、少なくともこれがグラスルーツ・レベルにおいてティーパーティー運動参加者たちを突き動かしていた衝動だった。だとするとティーパーティー運動は、「反オバマ」的な運動を展開する前段で、必ず党内反乱運動を立ち上げる必要がでてくる。インディアナ州の上院議員選挙で起きたことはまさにそれだった。しかし、ティーパーティー候補の右傾化ぶりに懸念を抱いた一般有権者は、マードック候補から距離をおき、結局敗退してしまった。ティーパーティー運動がその運動論を修正しない限り、それは共和党にとっては今後も複雑な存在であり続けるだろう。

ティーパーティー運動がトクヴィルのいう自発的結社の精神に基づいた運動であることは間違いないだろう。仮に保守系の運動を資金面で支えるコーク兄弟から資金提供された団体が介在していたとしても、それ自体はティーパーティー運動のグラスルーツ的な性格を消し去るわけではない¹⁰。それは圧倒的にグラスルーツ的な運動であった。インディアナポリス郊外の公民館で開催されたフェティッグが呼びかけ人のティーパーティー運動の集会に集まってきた人たちは、「いまのアメリカはまちがった方向にすすんでいる」という直感的な信念に動機づけられていたことは否定しようがなかった。しかし、それはグラスルー

ツ運動だからこそ衝動的で、分散的で、アメリカ固有の反知性主義的な衝動が見え隠れしていることを否定することもできないだろう。保守主義運動周辺には、常にこのような負の衝動が存在していた。こうした現象それ自体はなにもオバマ政権下において突然始まったことではない。しかし、その衝動を毎夕放送されるイブニング・ニュースで流してもおかしくないメッセージに成功裡に変換してきたことが、保守主義運動の台頭を支えてきた秘訣であった。その変換のシステムがティーパーティー運動台頭以降、あまりうまく動作していない。なぜそうなったのか。次節で見てみよう。

2. そもそもなぜティーパーティー運動はオバマ政権下において発生したのか

ティーパーティー運動がオバマ政権下において発生したのは、決して偶然ではないだろう。それはオバマ大統領自身が「変化するアメリカ」の象徴であり、ティーパーティー運動自体が「変化に抗する運動」という性格を内在的に有しているからだ。現に2012年の大統領選挙の結果を見ても、新しく輪郭を見せ始めたアメリカ（ヒスパニック、アジア系、アフリカ系、女性、若者、LGBT [=セクシュアル・マイノリティー] が総体として多数派を構成するようなアメリカ）は完全にオバマ大統領の支持にまわった。このような視点はともすると、ティーパーティー運動を人種差別的な運動であるとステレオタイプ化してしまう危険性があるが、必ずしもそういうことではないだろう。前節でも言及したとおり、ティーパーティー運動はあらゆるグラスルーツの運動がそうであるように、「否定的衝動」を内に含んでいる。その中に、オバマ大統領の「肌の色」を問題にする人がいないわけではないだろう。しかしながら、それは運動全体を突き動かす衝動ではない。それは自分たちがこれまで知っていたアメリカとは違うアメリカを予感させるという意味において、「反オバマ的」なのであり、それは人種差別主義とは微妙に一線を画しているとみるべきだろう。

この変化に抗する衝動は、具体的にはオバマ的な統治原理に基づく介入主義的な諸政策への抵抗というかたちをとった。ロナルド・レーガン（Ronald Reagan）政権以来、いわばスローガンと化した感がある「政府こそが問題だ」（レーガン大統領による1981年の大統領就任演説の一節）という保守的な世界観を覆し、連邦政府の役割を積極的に再定義しようとしたオバマ的な統治原理を、自分たちの生活空間に対する連邦政府による不当な侵入とティーパーティー運動の参加者たちは解釈した。ティーパーティー運動は、オバマ政権の一举一動をこのような図式にあてはめて意味づけをした。オバマ政権自体は、政府の権限強化それ自体を目的としていたわけではない。それは、オバマ的な統治原理の付随効果であった。しかし、このように意味づけをすると、オバマ政権の政策的成果——「7870億ドル規模の景気刺激対策」、「公的資金の投入による大企業の救済」、「金融規制改革法案」、「医療

保険制度改革（オバマケア）」などは、すべて連邦政府が本来ならミニマムな役割しか果たすべきでない領域における権限増大として解釈され、その本来の目的は黙殺され、「連邦政府の権限増大」という付随的な効果のみが突出して映るようになる。オバマケアに抗する声として、極端な場合、「連邦政府が個々人の身体に対して権限を及ぼそうとしている」という悲痛な叫びさけ聞こえてきたほどだ。筆者がインタビューをしたティーパーティー運動の活動家は、自分は医療保険がないが、オバマの個々人の身体への介入を受け入れることはできないと明言していた¹¹。こうして、オバマ政権は連邦政府と州、もしくは連邦政府と個人との原初的な社会契約を書き換えようとするラディカルな政権であるという解釈がティーパーティー運動の中で否定しようのない現実として定着していくこととなる。ここから「オバマは社会主義者だ！」という発言までは論理の飛躍があるが、要は憲法に示された原初的な契約を破り、アメリカという国家のあり方そのものに手をつけようとしているという草の根の不信感が、生のまま表出した発言と解釈することができよう¹²。

しかし、なぜこのようなオバマ的な統治原理に対する抵抗が従来の保守主義運動の運動インフラを介してではなく、グラスルーツを中心に湧き上がったのだろうか。その理由としては、保守主義運動内部で充満していたジョージ・W・ブッシュ（George W. Bush）政権への失望と、運動そのものが、オバマ政権が発足してから方向感覚を失っていたことが挙げられる。遡って、2001年に発足したブッシュ政権は、保守革命を完成させ、恒久的共和党多数派体制（パーマネント・リパブリカン・マジョリティ）の構築を託された政権だった。しかし、政権も二期目後半になると、ブッシュ政権への失望がかなりはっきりとしたかたちをとって保守派から表明されるようになる。ブッシュ政権を振り返ってみると、政府は肥大化し、財政赤字は膨れ上がり、イラクとアフガニスタンはいつのまにか対テロ戦争から国家建設事業に転化し、ソーシャル・イシューの面でも保守派が望むようなかたちでの大きな進展は必ずしもなかったことが次第に明らかになっていく。その結果、保守主義運動内部の異なる潮流がそれぞれ別の方向を向いて歩き出し、運動の一体性が失われ、統一的な運動を上から組織化していく機運を欠いていたのがオバマ政権が発足したばかりのころの保守主義運動の現状だった。2008年の大統領選挙で共和党は「マヴリック（一匹狼）」とも評されるジョン・マケイン（John McCain）上院議員（アリゾナ州）を候補に選び、オバマ候補に臨んだが、彼自身は保守主義運動の顔になりうる存在ではなく（マケインは安全保障問題を除けば、むしろ党内穏健派とさえ見られていた）、運動はリーダーを欠いた状態だった。さらに、これまで運動の台頭を支えてきた諸団体も精彩を欠き、条件反射的にレーガンへの回帰を訴えるばかりで、保守主義運動が変わることを妨げていた感さえあった。つまり、保守主義運動は運動インフラが整備されただけに、それが変化を

妨げているという矛盾に直面していた。これを見た、リベラル派のサム・タネンハウス (Sam Tanenhaus) は『保守主義の死 (The Death of Conservatism)』(2009年)を著し、話題を呼んだ¹³。

唯一活気づいていたのは、マケイン候補が副大統領候補として選んだサラ・ペイリン (Sarah Palin) 前アラスカ州知事の周辺だった。ペイリンは、ある意味、マケイン以上に「暴れ馬」だった。それは、保守主義運動が時間をかけて丹念に育て上げてきた政治家ではなく、突如としてメインステージに参入した加工される以前の生のままの「エネルギー体」のような存在だった。いま振り返ると、ペイリンの熱狂的受容は、ティーパーティー運動の台頭を予感させる現象であったといえる。飼いならされることを拒否したペイリンとワシントン DC の一員と化した保守派の活動家たちへの不信感を露わにしたティーパーティー運動への参加者たちは、かなりの程度相似形をなしているといえよう。しかし、この生のままの衝動に、明確な輪郭を与えたのが、オバマ政権が導入した諸政策であったことは疑いない。ブッシュ政権末期に自分の位置を確認する座標軸を失っていた保守派の中に、保守主義の原風景を思い起こさせるような介入主義的な諸政策を導入し、オバマ政権は意図せずに政治において一番やってはいけないこと、即ち、敵対陣営に自分の立ち位置を再確認させる新たな対立の座標軸を思念させてしまった。こうしてオバマ時代において保守派であることの意味を再確認し、従来、スクリーニング機能を有していた保守主義運動のインフラを迂回するかたちで、ティーパーティー運動がネット空間やフォックスニュース・チャンネルを介して全国化し、そしてグレン・ベック (Glenn Beck) などの扇動的な保守派の言論人に勢いづけられる中で、2010年の中間選挙に向けて加速していった。

3. 2012年大統領選挙とその後

2012年の選挙において、ティーパーティー運動が共和党に及ぼした影響は複雑なものであった。2010年の中間選挙同様、草の根の保守派を活気づけはしたが、いくつかの議会選挙において、本来ならば勝てるはずであった議席を落とし、大統領選挙の予備選挙を誰が一番右旋回できるかという戦いに変容させてしまった。本来、国際派のビジネスマンで穏健な実績のあるミット・ロムニー (Mitt Romney) 前マサチューセッツ州知事は、共和党候補として急激に右旋回せざるをえず、本来の強みをまったく活かすことはできなかった。無論、候補自身の問題もあろうが、それ以前に共和党自身が、各候補者が保守主義の原則に適っているかを厳しく吟味する「チェックリスト政党化」してしまっていた。このプロセスを勝ち抜いてきた候補が、9月に本選挙がはじまって中道旋回するにはかなりの労力を要する。しかも、その中道旋回も、ティーパーティー運動の監視の目で行わなければ

ならない。オバマ陣営は、ロムニーが中道旋回する以前に、右旋回したままのロムニー像を国民の間に徹底的に植えつけることに成功し、ロムニー陣営は、自身のイメージをコントロールすることに完全に失敗した。ロムニー候補は右旋回する過程で厳しい不法移民対策を打ち出し、これがヒスパニック票をロムニーから遠ざけ、はじめて総当票数の10パーセントに達したヒスパニック票の70パーセント以上をオバマが獲得したことは、まさにロムニーが「変わるアメリカ」に対応できていないことを印象づけることとなった。

当のティーパーティー運動は、2012年の敗北をどのように受け止めているかという点、その多くはロムニーの敗北を自身の敗北とは受け止めていない。その典型は次のような例だ。前述したフリーダムワークスのマット・キビー (Mat Kibbe) 会長は、ティーパーティー運動は包括的な社会運動ではなく、財政的保守主義を軸にした単一争点運動であり、その点からいうならば2012年の選挙で財政的保守主義は敗北したわけではなく、むしろ敗北したのは共和党エスタブリッシュメントであったと語っている¹⁴。たしかに本稿でも取り上げたインディアナ州以外に目を向けるならば、例えばヴァージニア州(ジョージ・アレン[George Allen] 元上院議員)、ウィスコンシン州(トミー・トンプソン [Tommy Thompson] 元知事)などでは、共和党エスタブリッシュメント系の候補が敗退している。そして、オバマ政権が発足してからも、共和党は財政的保守主義を掲げてホワイトハウスと対峙し、かつては裏の仕掛人的存在であった反税運動の拠点である全米税制改革評議会のグローバー・ノーキスト (Grover Norquist) 会長は、いまや日曜朝の政治トークショーに全米で最も影響力のある人物として紹介されるまでになっている。ノーキストは、ティーパーティー運動そのものとは一線を画しているが、そのリバタリアンの心性と財政的保守主義という点において、両者は多くを共有しているといえよう。ただし、その原理的な財政的保守主義に批判が集まっているということも事実であり、共和党内部からもノーキストから距離をおかなければという声は徐々にではあるが上がっている¹⁵。今後、この動きが、予算の強制削減や債務上限をめぐる議論との関連でどのように展開していくかを注意深く眺めていく必要がある。それは、ティーパーティー運動の今後の動向とも密接に関連してくるだろう。

むすび

2012年の大統領選挙は、アメリカが大きく変化していることを強く印象づけた選挙だった。それは人口構成や有権者の地理的分布に基づく変化であるだけに、不可逆的な変化でもある。共和党自体がこのような変化に取り残されているが、変化に抗する運動であるティーパーティー運動の場合はなおさらである¹⁶。今後、ティーパーティー運動がいまのままの状態、共和党内反乱勢力として党を拘束し続けるならば、おそらく共和党の再生に必

要な穏健派の包摂、そして中道旋回することをますます難しくしていこう。場合によっては、2014年の中間選挙では、ティーパーティー運動的な動きが共和党を再びつき動かし、オバマ政権に対する不信を刺激し、それなりの勝利をおさめることは十分に想定しうる。政権二期目の中間選挙は、一般論としていえば、政権党にとっては戦いにくい選挙となるからだ。そうするとティーパーティー運動の勢いは、2012年の敗北にもかかわらず当分続くことになるかもしれない。現に2013年1月に開会された第113議会においては、前述したランド・ポール上院議員やテッド・クルーズ上院議員などのティーパーティー系の政治家の威勢がいい。

オバマ政権としては、共和党の変質ぶりを強調し、先鋭化する共和党にしびれを切らした中間層の支持をとりつけ、大胆な政策運営に乗り出していきたいところだろう。ただし、それをいま妨げているのが、財政状況をめぐるホワイトハウスと連邦議会、とりわけ共和党が多数派を占める下院との激しい駆け引きである。仮にティーパーティー運動そのものはあまり目立たなくなっても、財政的保守主義を掲げて当選した議員たちは、この原則から離反することはできず、その限りにおいては、ティーパーティー運動的な動きは当面はアメリカ政治を大きく拘束し続けるだろう。

—注—

- ¹ 将来の大統領候補の一人とも目されているマルコ・ルビオ上院議員（フロリダ州）も、当初はティーパーティー系の議員として知られていたが、最近は運動と若干距離をおいているようにも見受けられる。
- ² ティーパーティー運動の包括的な考察については、久保文明編『ティーパーティー運動の研究—アメリカ保守主義の変容』（NTT出版、2012年）を参照。
- ³ “Senate Ratings,” *National Journal*, February 12, 2013
<<http://www.nationaljournal.com/magazine/senate-ratings-20120223>> accessed on February 23, 2013.
- ⁴ フリーダムワークスについては、久保編、前掲書所収の中山俊宏「ティーパーティー運動とインスティテューションの崩壊」を参照。
- ⁵ Greg Fetting, *Tea Party on Safari: The Hunt for American RINO* (Bloomington: iUniverse, 2012).
- ⁶ 外交問題評議会などを悪玉に仕立てた国際的陰謀論としては、Jim Marrs, *The Hidden History That Connects the Trilateral Commission, the Freemasons, and the Great Pyramids* (New York: Harper Collins, 2000) などがある。このような世界観は、「国際社会」に不信感をもつ右翼的サークルの間では驚くほど浸透している。
- ⁷ Fetting, *op.cit.*, pp. 46-47.
- ⁸ Sean Sullivan, “Roots of Lugar’s Defeat Began Back Home,” *National Journal*, (May 8, 2012). ルーガーの敗北については、ルーガーが地元インディアナにめったに帰らず、完全にワシントンの住人と化してしまっていたため、必ずしもティーパーティー運動だけに敗北の原因を帰すことはできないという見方もある。
- ⁹ “Statement by the President on Senator Richard Lugar,” White House, May 8, 2012
<<http://www.whitehouse.gov/the-press-office/2012/05/08/statement-president-senator-richard-lugar>> accessed on February 24, 2013.
- ¹⁰ Frank Rich, “The Billionaires Bankrolling the Tea Party,” *New York Times* (August 28, 2010).
- ¹¹ 著者によるティーパーティー活動家へのインタビュー（インディアナ州インディアナポリス、2012年9月25日）。
- ¹² John Perazzo, “Barack Obama, the Socialist,” FRONTEPAGE.COM, September 6, 2012

- <<http://frontpagemag.com/2012/john-perazzo/barack-obama-the-socialist>> accessed on February 25, 2012.
- ¹³ Sam Tanenhaus, *The Death of Conservatism* (New York: Random House, 2009).
- ¹⁴ Matt Kibbe, “The tea party was not an Election Day loser,” *Politico*, November 14, 2012
<<http://www.politico.com/news/stories/1112/83798.html>> accessed on February 25, 2012.
- ¹⁵ Aaron Blake, “Will the fiscal cliff break Grover Norquist’s hold on Republicans?,” *Washington Post* (November 26, 2012).
- ¹⁶ 共和党が新しい政治的地平に対応できていない様子については、Ronald Brownstein, “Future Shock,” *National Review* (November 12, 2012), pp. 32-36 を参照。